

Title	初期マルクスにおける欲求概念(上) : 個人的欲求と社会的欲求の弁証法
Sub Title	La conception des besoins chez le jeune Marx (1) : la dialectique entre les besoins individuels et les besoins sociaux
Author	的場, 昭弘
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1980
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.73, No.5 (1980. 10) ,p.771(117)- 789(135)
JaLC DOI	10.14991/001.19801001-0117
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19801001-0117">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19801001-0117</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 初期マルクスにおける欲求概念（上）

——個人的欲求と社会的欲求の弁証法——

的 場 昭 弘

## 目 次

### 序

#### (一) 欲求理論の批判, 検討

(a) 窮乏化論的把握

(b) 人格形成としての欲求把握

(c) 過少消費的欲求批判

(d) 欲求の対象の把握

#### (二) 初期マルクスの欲求理論の展開

(a) 欲求と疎外

(b) 欲求と貨幣

(c) 欲求と分業 (以下次号)

(d) 個人的欲求と社会的欲求

### 結 び

## 序

欲求という言葉によって意味されるものはきわめて多岐にわたっている。しかし、今あえて欲求という概念を検討する必要があるとすれば、それは人間が経済行動を営み、社会を形成していく過程における人間個人の主体性とそれに対する社会とのつながりにおいて以外にないであろう。現在まで我々は欲求という言葉から、人間の主体的意志という側面をはずし、社会によって規定された個人の欲求であるとか、肉体的な生理現象としての欲求であるとか、社会諸集団の欲求であるとかを論議してきた。確かに欲求それだけを取りだせば、そういった議論も意味をもってはいたであろう。しかし、大事なことは、欲求という概念は、人間と人間とが対峙するさいの最初の否定（欠如 *manque*）だということである。<sup>(1)</sup>人間が人間に対して関係していく行為は、欲求という否定を通した〈否定の否定〉として考えることができるのであって、ヘーゲル、いわんやマルクスの脳裡につい

注(1) J. -P. サルトルは、欲求の概念のなかに、この否定の否定という概念を読み込んでいる。「欲求 (*besoin*) のなかにすべてが見出されるのであって、これこそが人間というこの物質的存在と、それを自己の一部としてふくむ物質の総体とのあいだの第一の全体化的関係なのである。(一略一) 実際、欲求によって、物質のなかに第一の〈否定の否定〉と第一の全体化とがあらわれてくるのであって、欲求とは、それが有機体の内部における一つの欠如 (*manque*) として告知されるという意味では否定の否定であり、逆に、それによって有機的全体性がそういうものとして自己を保存しようとするという意味では積極性なのだ。」J. -P. Sartre, *Critique de la Raison dialectique*, Tome I. 竹内芳郎他訳, 「弁証法的理性批判」, I, 人文書院, 1962, p. 88.

て離れなかったのは、こうした〈否定の否定〉の根底としての欲求であったことは疑いえないだろう。こうした否定の空虚さ (besoin) は、主体性を通してのみりこえられるものであって、その結果が社会集団的なものであれ、生理的なものであれ、個人的なものであれ、主体性をもった欲求をぬきにしては語れないのである。

さらに人間の欲求は、言語や道具といった媒介を通じての交通行為以外のなにものでもないものであって、人間は始めから身体をもった主体の総体として、社会全体や諸集団に対して対峙して、常にこれを乗り越えようとして生産交通体系といったものを変革していく。我々にとって重要なことは、個人的な主体の欲求が何であるかということではなく、また社会の欲求が何であるかということでもなく、この二つの欲求が対峙しているという事実と、それを乗り越えようとしている主体があるという事実そのものなのである。これを我々は個人的欲求と社会的欲求との弁証法とよぶことにしたい。だから、こうした弁証法をぬきにして、共産主義社会では人間が自己の身体以外のなにものも使わないで社会と同一化していこうと考えることは、我々の論理を否定してしまうことになるわけである。なぜなら、この論理に従うとこうした社会では言語や道具といった個人的欲求と社会的欲求との間の媒介物をも否定されてしまい、その媒介物に働きかける個人的欲求相互の主体的意志の問題が消滅してしまうからである。

マルクスの欲求概念を問題にする理由は、人間個人がみずからの身体の総体として社会を主体的に形成していく過程を、欲求の中に見い出している思想家はマルクス以外にないからである。主体的欲求が、言語や道具をつうじて現に生きている人間の活動として実現していく過程をマルクスは労働という言葉で表現し、彼はそうした言語や道具といった媒介によって形成される高度な人間関係を分業という形で把握している。そうした把握は、マルクスが人間個人の主体的欲求をいかに人間社会の進展の中心にすえていたかを物語っているし、彼の生産諸力と生産諸関係の展開もその限りでの展開であったということをも物語っている。

欲求という概念は、マルクスの場合(これは本文の検討を通して一層明らかになるであろうが)、あくまでも生産と交通とに結びつけられた概念である。そのため欲求は歴史的に現存する諸個人の欲求として問題にされ、革命への欲求(願望)であるとか異性に対する欲求(欲望)であるとかは、まったく問題にならない。マルクスにとって欲求が基本的カテゴリー<sup>(2)</sup>となるのは、欲求が生産に規定され、かつ規定していくというきわめて現実的な内容をもつからである。その点でこそ、ヘーゲルで

注(2) 基本カテゴリーのここでの意味は、すべてを統一的に説明していく概念ということではなく、それ自体独立したカテゴリーであり、他のカテゴリーからは導出できないような概念ということである。アグネス=ヘラーの次の指摘は正しい。「われわれの考えるところでは一義的な社会存在論的カテゴリーは原理的に定義不可能である。」Agnes Heller, Hypothese zu einer marxistischen Werttheorie, 1976, 良知力他訳「マルクス主義的価値論のための仮説」法政出版, p. 28. 「要綱」では、マルクスは単純なカテゴリーの1つとして欲求を理解している。K. Marx, Grundrisse der kritik der politischen Ökonomie, Dietz, Berlin, 1953, S. 21, (高木幸二郎監訳「経済学批判要綱」大月, p. 22)

はなくマルクスの欲求理論が問題となるのである。

ここで欲求 (Bedürfnis) を用語的に明確に定義しておこう。欲求という用語は、欲望 (Geltüste, Begierde) や需要 (Bedarf, Nachfrage, Begehren) や願望 (Wollen) とは明確に区別されるものである<sup>(3)</sup>。フランスのある社会学者は「欲求という概念はあらゆる言語の中で、不足、欠乏、対象の不在とむすびついている。」と述べ、さらに「欲望、願望、衝動などとは区別される。」と述べている<sup>(4)</sup>。欲求は先に指摘していたように欠乏 (manque, Notdürftigkeit) の意味をもつ否定としてとらえられるべきである。マルクスの場合、Bedürfnis と Begierde が欲求の類概念として使われるが、その意味は基本的に充足 (Befriedigung) に対応している欲求ということである。

しかし、ここで言及する『ドイツ・イデオロギー』までの範囲では、欲求と資本主義的生産との矛盾の関係は必ずしも明確ではない。それは欲求に関してのマルクスの見解がこの段階までは不十分な経済分析の上に基礎づけられているからである<sup>(5)</sup>。それにもかかわらず、欲求の基本概念は、この段階までに完成しているといえよう。ここで本稿の範囲を初期マルクスに限定しているのもそうした理由からである。ここで完成された欲求の概念とは、一方で人間個人の主体的欲求が、生産、交通という媒介を通じて社会を形成し、他方で社会は社会的欲求として個人的欲求に対峙するという概念である。

こうした理由から、本稿は範囲を初期マルクスに限定し、その欲求の対象の把握と実現の問題を展開することによって、マルクスにとって欲求という概念がいかに関係相互の〈否定の否定〉としての弁証法的媒介をなすものであるかを明らかにしたいと思う。

### (一) 欲求理論の批判、検討

マルクスの欲求論の内容の検討にはいる前に、これまでの研究を検討し、問題の意味をより明確にしてみることにしよう。

従来の研究を区分すると、3つに分かれるように思われる。第1に欲求の中に労働者の変革の欲求を見い出していく立場、第2に欲求の中に個人的人格の形成を見い出していく立場、第3に欲求の中に個人的主体性を見い出していく立場である。それぞれの立場の相違は、彼らの問題意識の相違から生じている。たとえば、欲求論に変革の欲望をみる人は、賃銀問題に関心をもっているし、個人的人格形成をみる人は、資本主義の物神性批判に関心をもっている。個人的主体性に関心をも

注(3) 欲望については、フロイトやラカンなどが問題とする Begierde や Désir などのような人間心理の欲望がそれにあたる。需要については、消費に対する満足度、メンガーが人間的需要 (Der menschliche Bedarf) と呼んでいるようなものを指している。

(4) Paul-Henry Chombart de Lauwe, Les intérêts contre les besoins la double Nécessité, La Pensée, n° 180, avril 1975, p. 126.

(5) したがって欲求と使用価値や交換価値との関係をこの段階で論議することはできない。

つ人々は、現在の社会主義の過少消費的傾向への批判から出発している。だから、彼らの問題意識を理解せずして、3つの論者をいたずらに個々検討していくことはあまり積極的意味をもたないであろう。そこで彼らの問題意識に関連した欲求論を展開する上で必要と思われる点を3つにまとめ、それをどう理解していくかでそれぞれの内容を検討してみたい。

その3つとは、

- 1) 欲求の概念
- 2) 資本主義社会での欲求の意味
- 3) 社会主義社会での欲求の意味

である。この3つの問題をどのように取り扱うかによって、3つの論者の欲求概念は明確となってくるであろう。さらにこうした批判検討をとおして、逆に本稿の意図がより明確となるであろう。

#### (a) 窮乏化論的把握

こうした把握から欲求論を展開するのは神谷明氏と村串仁三郎氏である。<sup>(6)</sup>特にマルクスの欲求論を内在的に検討しているのは神谷氏であり、ここでは神谷氏の所説を検討してみることにする。

日本における欲求論の展開は、階級闘争と密接に関係している。その根拠は、労働力の価値は生産力の発展とともに低下するが、労働者の欲求は、それに刺激されて一層増大するので、欲求>実質賃金になるという窮乏化論にある。<sup>(7)</sup>この場合、欲求の充足は実質賃金の上昇への賃銀闘争としてあらわれる。神谷氏は、こうした展開を踏まえつつ、さらに欲求に変革の欲求を加えようとする。

「マルクスの欲望論の射程はもっと広いもので資本主義社会における欲望論の発展は、一方ではさまざまな欲望をもった人間を労働力として日日再生産し、他方では資本と賃労働との関係を揚棄する欲望すらうみだすと考えていたように思われる。」<sup>(8)</sup>神谷氏の欲望理論は、賃銀闘争から革命闘争への欲求を引き出したところに中心点がある。これによって第1の問題についての氏の考えがはっきりする。

氏の欲求の概念は、広く変革への欲望(Wollen)まで含んでいる。変革への欲求がいわゆる欲求(Bedürfnis)になるには、生産体系の矛盾の把握が必要であるが、氏の論理の中にはそうした分析はなく、労働者の主体性の獲得だけが必要条件となっている。氏のマルクスの欲求論への視角も、プロレタリアートの主体的意志の形成論としてとらえられている。欲求という概念の中にある人間

注(6) 神谷明「マルクスの欲望論」経済論叢, 124巻第1, 2号-①

神谷明「労働力の価値と欲望問題」経済論叢, 121巻第3号-②

村串仁三郎「マルクス欲望論の問題点と研究視角」(上, 下) 経済志林, 40巻4号, 41巻1号, 1972, 1973. 村串氏は、日本における欲求論の論争史をまとめられているが、それをみても、日本における欲求論が窮乏化論中心であったことは明らかである。

(7) 神谷明, 前掲② p. 50.

(8) 神谷明, 前掲① p. 42.

の個人の解放の問題や、資本主義下での社会的欲求による個人への圧力の問題も、氏のマルクス欲求論研究の中ではとりあげられていない。

したがって、2)の問題としての資本主義下での欲求の意味づけは、階級闘争としてだけとらえられることになる。労働者の欲求は、個々人の人間的欲求の進展の結果ではなく、労働者と資本との対立が産む不幸な欲求としてとらえられる。実質賃銀以上への労働者の欲求も、諸個人の発展のための欲求ではなく、労働者への圧迫に対抗する欲求としてだけとらえられる。したがって資本主義下での個人的欲求の展開は、非常にネガティブに展開されている。

3)の問題に関しては、氏は直接何も語っていない。したがって労働者の急進的な変革の欲求は、何に向かって進むのかは明確ではない。「社会主義のもとでは欲望はすばらしく増大し、人間の活動を展開させる刺激となり、真に社会的人間となる……」<sup>(9)</sup>という指摘も、実現される欲求が、労働者の欲求であるのか個人の欲求であるのかが明確ではないし、社会的人間であるということは、どのような意味で社会的であるのかが(たとえば、個人の欲求が直接社会的欲求となるとかのよう)明確に言及されていない。社会主義での欲求の意味が不明確であるのは、資本主義での欲求のもつ意味が階級闘争というネガティブな分析に向けられ、欲求のもつ社会形成としての(言い換えれば個人的欲求の)ポジティブな面が欠如したためである。

以上の3点の分析から、階級闘争へ限定するこうした欲求論は、マルクスの欲求論の真の意味を理解していないように思われる。マルクスの欲求論の問題はむしろ資本主義下では諸個人の欲求がなぜ社会的規制をうけるのか、また社会主義社会では社会的規制としての社会的欲求は消滅するのか、それとも福祉的欲求として個人と分離して、なおかつ存在するのかといった問題であるように思われる。

### (b) 人格形成としての欲求把握

個人的欲求と社会的欲求を理論的中心点にすえて欲求論を展開するのがフランスのルシアン＝セーヴと La Pensée 誌 '75年特集号の人々である。<sup>(10)</sup>とりわけルシアン＝セーヴの「マルクス主義と

注(9) 神谷明, 前掲①, p. 52.

(10) Lucien Séve, *Marxisme et Théorie de la Personnalité*, éditions sociales, 1968. 大津真作訳「マルクス主義と人格の理論」法政大学出版, 1978. *Besoins et consommation*, La Pensée, n°180, avril 1975. この論文集の寄稿家の論理をみてみよう。Jean-Pierre Terrail は変革の欲求の基本構造を恐慌の中に見ている(① *Fétichisme de la marchandise et idéalisme des besoins*, p. 35)そして、有効需要と支払い可能欲求との分離という点にその原因を求める。この点で彼は窮乏化論的欲求論からはまぬがれている。社会主義での欲求という点では、セーヴと同じである(② *Sur la nature historique et sociale des besoins*, p. 129. ①②の論文とも、M. Decaillet, E. Préteceille, J.-P. Terrail, *Besoins et Mode de Production*, éditions sociales, 1977 に所収。)。Maurice Decaillet は、社会主義での欲求把握で独特の見解を示している。彼は、個人的人格形成だけでなく、自主管理への欲求をあげ、その場合の社会主義は市場も貨幣も消滅しないで、市場を通じて欲求はみたされている(*Le socialisme et les besoins*, p. 251, 前掲所収)そこで生じる無政府性への管理が人間的欲求である。(貨幣問題に関しては私と同意見である。拙稿「社会主義社会における貨幣廃棄の諸問題」三田学会雑誌5号, 1978 参照)そして、彼はヘラーと違い余暇を管理する労働へかえ、社会的人間をつくりだそうとする。分析の方法としてもっとも正しい位置にあるのが Paul

人格の理論」は彼らの思想の中核である。そこでルシアン＝セーフを中心批判、検討を行っていくことにする。

彼の基本的視点は2つに分かれている。第一は、諸個人が階級という姿をとってあらわれざるをえない資本主義社会では、人間の欲求を真に検討することはできないということである。すなわち、こうした社会では人間の欲求は、社会的欲求という圧力によって歪められるので、個々人の人格的な欲求としては表現されえないということである。第二には、こうした資本主義体制が揚棄されたのちにはじめて人間個人の真の全面的開花がなされ、そこではじめて個人の欲求が、問題となりえるということである。すでにこれによって、2)と3)の問題は明確になっている。

1)の問題である欲求の概念をみよう。彼のいう欲求は、個人的欲求と社会的欲求にわかれる。その対象の範囲には、願望は含まれていない。個人的欲求と社会的欲求の概念であるが、それは資本主義と社会主義では明確に区分されるものとされる。資本主義では個人的に独立した欲求などというものは仮象であるから、欲求は個人を規制する社会的欲求としてしかあらわれ<sup>(11)</sup>ない。しかし、それにもかかわらず、個人的な欲求というものが仮定できるとすれば、それは個人の人格的發展をまっぴらからということになる。個人の人格的發展が保障される社会主義の下では、社会的欲求はもはや個人への圧力の形をとらない。そうした場合には、社会的欲求は個人を規制する欲求というのではなく、個人的欲求をのぼすための福祉的な欲求ということになる。個人的欲求もここではじめて、真に個人的欲求となるわけである。

個人的欲求と社会的欲求との関係は、生産力によって規定される人間の社会的関係から生じる欲求ということになる。そして生産体系に関連する欲求であるから、社会関係的欲求だけでなく、階級闘争もこうした生産体系に関連して展開される。「発達した形態のもとでの人間の欲求は、心理活動（欲求がこれの土台とみなされている）との関連でいえば、先史時代の、下等社会の原始の、人間の<sup>(12)</sup>本質を表現したものでは絶対でない。それは本質的に人間の歴史から生みだされたものである。」

2)の問題である資本主義のもとでの欲求の意味をみると、彼は資本主義下の欲求を、個人的欲求と社会的欲求との対立とみている。したがって、こうした対立を無視した心理学など存在しえないことを再々彼は強調する。心理学はこうした対立を対象とすべきだというわけである。この対立は、

Henry Chombart de Lauwe (前掲論文)である。彼はヘーゲルとマルクスとの欲求理論の関係を指摘する。「ヘーゲルにとって欲求、技術、労働は、全体が組織対象をなす個別的体系の体系をなしている。こうした個別的体系の全体は理論的、実践的文化の欲求を満足させれば調和する。」(p. 130)マルクスについて「マルクスは、資本主義社会では欲求、必要がエゴイスト的利益をもっと要求する方向にすすむという考えを再び採用している。」(p. 131)こうした関係の中から彼は、マルクスにとっても個人的欲求と社会的欲求の関係は重要なモチーフをなしていると主張する。その他 Jean-Louis Moynot は、Decaillet と同じ立場に立っている (Déterminations sociales et individuelles des besoins, La Pensée, 1975)。「人間が自己の労働の主人になるという根本的な人間の欲求は、生産手段の集団的領有、民主主義、自由の発展によって実現されよう。」(p. 68)。

注(11) L. セーフ、前掲訳書 p. 7。つまりフォイエルバッハへの第6テーゼから発想を得ている。

(12) 同上、p. 381。

資本主義社会の生産体系がつくりあげたものであるから、この心理学は経済学的な生産と欲求をとり扱わなければならない。

しかし、移行の問題に関しては、労働者としての個人の貧困から説明されるが、彼も窮乏化論的把握を行っている。すなわち、個人の欲求が変革の欲求となってくるのは、個人の欲求と生産体系全体との矛盾のときではなく、労働者が窮乏化していくときであると考えている。彼も資本と労働との関係の中にのみ欲求をみていて、生産体系全体との関係をみていないことを露呈している。

次に3)の社会主義下での欲求の意味づけをみよう。共産主義は（この場合高次の社会主義）「各人はその欲求に応じて」という言葉が示すように、共産主義は個々人の欲求の社会であり、「共産主義が人間の人格の発展に関する科学としての心理学に前代未聞の理論的実践的昇格を用意する、いや要求する<sup>(13)</sup>」社会主義は、個人的人格の完成される場所として措定されている。

個人的人格の形成といった場合、それはそこに外部による個人への規制がないということの意味しているだけで、社会的欲求が消滅したということの意味するわけではない。たとえば労働は、資本主義では資本によって強制されてくるわけであるが、社会主義でも労働しなければならない事実は変わらない。ただ社会主義では、個人の欲求が第1で、そのうちのひとつとして労働が生じるわけである。「こうした場合、私の第1の欲求は労働ではない。反対に私の第1の欲求が労働を必要としているのだ。<sup>(14)</sup>」

こうして彼は社会主義の中の個人の欲求を労働と自由時間の両方にむすびつける。これは、共産主義をして自由時間の拡大による労働の苦役から逃れる巨大な消費社会であるとする第3の論者（ブタベスト学派）と対称的である。「共産主義を余剰の社会、自由な消費の社会と特徴づけただけではまたそれをもっと深い本質において定義したことはない。というのは、ただこのようにだけ定義された社会は、まさに人間をたえまない、それゆえに不合理な欲求の再生産（拡大と形容してもよい）に直面させるだけだからである。共産主義は超消費社会などではない。共産主義のもっとも深い本質は、それが『各個人の完全で自由な発展』（一略一）を実現し、かつそれを要求することからなっている。<sup>(15)</sup>」しかし、彼はある意味で消費社会の問題から手を引いただけで、消費社会のもつ人間の欲求への歪曲的側面について語るうとはしない。

しかしながら、以上の論理からわかることは、セーフの欲求は、マルクスの欲求理論の本質である個人的欲求の実現の問題を適確にとらえているということである。しかし、資本主義での欲求の問題をうまくとらえながらも、その変革に関しては単純な窮乏化説をとるだけである。ここでも変革の欲求に関して生産体系全体との関連は、不明確となっている。さらに社会主義の欲求も、個人の欲求の完成という点では正しいのであるが、個人的欲求と社会的欲求のつながりの問題が等閑視

注(13) L. セーフ、前掲訳書、p. 19.

(14) 同上、p. 438.

(15) 同上、p. 440.



されている点で、マルクスを正確に理解しているとはいいがたい。

(c) 過少消費的欲求論批判

この立場に属する人々は、現実の社会主義社会における過少消費的欲求の抑圧に対して批判を行うことによって欲求論を展開しようとする。ハンガリーのブタペスト学派がその典型である。とりわけアグネス＝ヘラーはその代表者である。<sup>(16)</sup>彼女の欲求論の概念は、東欧の社会主義の矛盾に端を発している。その内容を分析することから始めよう。

彼女は、物神性は市場関係に基づき、市場関係を廃棄すれば物神性はなくなるであろうという東欧諸国の伝統的見解を批判する。<sup>(17)</sup>「商品生産が否定されれば(一略)その場合あらゆる疎外の形態は消滅させられるはずである。」<sup>(18)</sup>という論理の真偽を問う。東欧では商品生産は擬似的であるので、物神性は存在しないはずである。ところが一方で権力エリートによる諸個人の意志決定の否定が行われている。「自由の撰択は自由の完全な否定、欲求の支配、欲求充足の支配に置き換えられている。」<sup>(19)</sup>ここでは貨幣をもつかどうか財の購入条件ではなく、権力の獲得が財の購入条件である。ここでは商品の物神性は、権力への物神化に変わったにすぎないと彼女は主張する。

彼女は、従来の疎外論の問題が商品の所有の抑制を通じて考えられている点を批判する。「東欧社会では、社会的富の成長は、諸個人の貧困化をとともなう。」<sup>(20)</sup>ことになり、疎外は、諸個人の個人的消費の窮乏化という点にあらわれるわけである。

彼女は現実の社会主義での基本矛盾の原因が、市場関係の否定と、疎外・物神性の揚棄とを混同したことにあると考えている。むしろ個人の消費能力の拡大、生産への意志決定の拡大こそが、物神性や疎外を揚棄するものだと考える。諸個人の自覚的意識の発達には、個人的人格が市場をとおして、たとえばがめられた形でも展開されることが必要であるということを彼女は付加する。

さて、こうした前提をふまえて1)の欲求の概念の問題について分析することにしよう。彼女の欲求は、生産から離れた自由時間にもとづいて形成される広い概念をもった欲求である。<sup>(21)</sup>したがって、

注(16) Agnes Heller, *Theorie der Bedürfnisse bei Marx*, VSA., Verlag, 1976 (拙稿「書評—マルクスにおける欲求理論」三田経済学研究21号, 1979を参照)。

(17) Ferenc Fehér, Agnes Heller „Diktatur über Bedürfnisse“ 1979は東欧社会主義の現状を「欲求支配」と呼んでいる(S. 32)。Maria MárkusとAndras Hegedüs, *Gemeinschaft und Individuum, Beiträge von Lukacs etc., Individuum und Praxis*, 所収)は、ハンガリーを非人間化した社会として特徴づけている。

(18) Agnes Heller, *Leitidee zur Transformation osteuropaischer Gesellschaftsformation*, (Fehér, und Heller, *Diktatur über Bedürfnisse*, 所収) S. 10.

(19) Agnes Heller, a. a. O., S. 11.

(20) Id., S. 18.

(21) A. Heller, *Theorie der Bedürfnisse bei Marx*, S. 107. 自由時間の増大と労働の問題に対しては、Márkus (*Der Mensch als gesellschaftliches und bewußtes Naturwesen*, Lukacs 他編, 前掲所収)が検討している。そこでは、広い活動として労働がとらえられるので自由時間の増大は社会主義の欲求とされる。Maria MárkusとAndras Hegedus (*Loisir et Dévision du travail, Les temps modernes* 1975)で「経験は、余暇の時間を制限することは《自由の王国》への接近にとって解決とはなりえないということを示してきた。」(p. 2807)と述べている。

欲求は市民社会の生産消費の関係をとおしてでてくる個人的欲求体系ではない。欲求の範囲には、願望まで含まれていて、個人的欲求は社会改革という願望までが含まれることになる。そこには生産力との明確な対応関係はみられず、窮乏化だけの論理である。個人的欲求に対して社会的欲求は個々人への規制にすぎず、社会主義では消滅してしまうものである。「欲望は個人の<sup>(22)</sup>カテゴリー、あるものへの内的要求、強制、<sup>(22)</sup>渴仰である。」

欲求の内容が確定すれば、その資本主義での意味はおのずから明確になる。資本主義は、基本的な人間の欲求を確立することができるが、個々人の欲求はそれを越えてしまう。労働者としての個人が窮乏化していくのは、物的に貧困化していくわけではなく(むしろそれは東欧である)、物的な欲求以外がおさえられるという点にある。たとえば、余暇の時間も、再生産として金銭的な問題と化してしま<sup>(23)</sup>うからである。社会的欲求は、個人の欲求を物化する役割をもっている<sup>(23)</sup>ので、急進的な欲求によってこれを克服しなければならない。急進的欲求は個人としての労働者の自覚であり、窮乏化や恐慌によって影響をうける階級闘争の欲求ではない。彼女にとって資本主義はまったく生産体系に矛盾をもたない体制としてあらわれる。「ブルジョアの生産関係(近代資本主義)は、マルクスが思いこんでいたような形では生産諸力の発展の障害ではないということはいまのところ疑いのない事実<sup>(24)</sup>である。」急進的欲求は個人的主体による自由撰択そのものでもある。それを決めるのが願望となっている。

社会主義社会の欲求の意味は、個人的欲求の圧力となっていた社会的欲求を取り除くことである。第1に物的消費に対する個人的欲求が確立しているわけであるから、諸個人の欲求は教育、文化、芸術といった精神的欲求の充足へと向かう。それは労働から離れた自由時間の獲得への欲求であり、それによって個人は自己の全面的欲求を貫徹できることになる。ただし、彼女が、そのために巨大な生産力をもった消費社会としての社会主義を前提していることは、言うまでもない。ここで、社会にいる人間としての相互関係は、生産を離れて可能かどうかという問題が残されているが、彼女にとっては個人的欲求と社会的欲求とは一致するから(同一性の社会)、そうした問題は起こりえない<sup>(25)</sup>のである。

#### (d) 欲求の対象の把握

以上の検討から、マルクスの欲求論に必要な諸概念がでてくる。それをまとめると次のようになる。

注(22) A. Heller, Hypothese zu einer marxistischen Werttheorie, 前掲訳 p. 32.

(23) Ernest Mandel, Der Spätkapitalismus, Suhrkamp, 1972, 18章(飯田、昶、山本訳「後期資本主義」Ⅲ, 柘植書房, 近刊)も資本は労働の生産性のために個人の才能、欲望の自由時間の発展を必要とすることを説いている。

(24) A. Heller, a. a. O., 前掲訳書 p. 134.

(25) 「われわれが社会主義的展望について述べる場合には、われわれはその構造が万人にこの原則的な可能性を与えるような社会個人によって組織され、しかも積極価値を発展させる共同体を築きあげる社会を具体的に思っているのである。」A. Heller, Individuum und Gemeinschaft, 1976, 良知力他訳「個人と共同体」法政出版, 1976, p. 33.

1) 欲求の概念の中心的内容は、人間諸個人のもつ人間関係であり、願望や欲望などは含まれない。それらが問題となるときは、生産諸力と欲求の変化が問題となる場合だけである。さらにマルクスの欲求の概念は、個人的欲求と社会的欲求との弁証法的関係として把握されるということである。

2) 資本主義分析に対して欲求がもつ意味は、社会的欲求と個人的欲求との対立という点に求められる。第1に、労働者としての個人の欲求を社会的におさえしていく社会(資本)の欲求(すなわち剰余価値獲得への欲求)と社会的欲求への個人的欲求の闘争(労働力価値の確保)としてとらえられる(深層)。第2に、個人それ自身の多面的欲求と社会の量的欲求との対立としてとらえられる(表層)。変革への欲求は、両方の視点からなされるとともに、それは生産体系との矛盾との関係からなされる(初期マルクスではこうした展開は弱い)。

3) 社会主義社会での欲求は、個人的欲求が社会的欲求に規制されないという点から規定される。個人的欲求は、資本という社会的規制をうけないし、物的規制をうけない。しかし、資本という規制のかわりに社会には新たな社会の欲求が出現してくる。この社会の欲求は、個人と対立するものではない。

ここでのマルクスの欲求論の展開は、こうした点からなされる。結果を先どりすれば、マルクスの展開もこうした形をとっているように思われる。

## (二) 初期マルクスの欲求理論の展開

マルクスの欲求概念を、それ自身として把握することは容易ではない。欲求という言葉が文中に見出すだけでは統一した概念を得ることはできないからである。そのためマルクスの基本的モチーフとして既に多くの研究がなされている、疎外、貨幣、分業といったカテゴリーを通して理解することが、最良に思われる。それは、欲求がこうしたカテゴリーに対してどういう意味をもつかということの探求を通じて、欲求の概念をより明確化するということでもある。

### a) 欲求と疎外

マルクスにとっての疎外の問題は「経哲草稿」第1手稿を通して検討することができる。この中でマルクスは、人間にとっての疎外は、生産における労働過程、生産物、人間そのもの、類などこれらすべてからの疎外としてあらわれることを展開する<sup>(26)</sup>。その場合、こうした生産における疎外は、人間の社会階級としての疎外としてあらわれている。だから人間個人の疎外は、社会階級である労働者の人間的なるものからの疎外としてあらわれる。個人の欲求は、労働者としての人間の欲求で

注(26) K. Marx, Ökonomisch-Philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844, Werke, Ergänzungsband, erster Teil, Dietz Verlag, (以下 MEW. と略す), 藤野沙訳「経済学哲学手稿」大月書店, 1963, 第一手稿では、欲求という言葉はあらわれないが伏在的に読みとることは可能であろう。

### 初期マルクスにおける欲求概念(上)

あり、個人の欲求の解放は、労働者の欲求の解放である。その役割は最も疎外されたプロレタリアートに体现されてとらえられる。こうした展開の基礎をなしている思考を検討することによって疎外論と欲求の意味を探ることにしよう。

第一手稿では、国民経済学のカテゴリーにしたがって、労働者、資本家、地主といった社会階級と、それを包括する人間の基本的定在としての類が、取り扱われる。そのため、ここでは、人間諸個人としての個人的欲求は課題とならず社会階級としての欲求が問題になる。このように社会階級として欲求が問題となった原因は、主として2つあるように思われる。第1に、マルクスの社会把握の問題、第2に、それを背景にした彼の経済学へのアプローチの問題である。

第1の社会把握に関しては、マルクスの思想形成のいくたびかの変遷の結果として考えられる。それを詳細に追うことは本稿の課題ではないが、これから展開される理論の前提として必要であるかぎりにおいて若干触れておく必要がある。

マルクスの思考過程は、欲求論に関していえば、「経哲草稿」第一手稿までは大きく二つに分かれるように思われる。すなわち「法哲学批判序説」までと、「経哲草稿」までとである。

当初のマルクスの視点は学位論文にみられるように個人<sup>(27)</sup>の全体に対する優位性にあつたようである。マルクスは、この論文で個人の主体性を通じて実体(社会の内容)を把握するという立場を確立し、そこに実践という青年ヘーゲル派共通の用語を提示し、全体と個人との関係を問おうとしていた<sup>(28)</sup>。しかし、問題の中心は全体と個人との相関よりも、個の存在(Wesen)の問題であつたように思われる。多くのノートはそうした内容を強く押しだしている部分の引用で、うずめられている<sup>(29)</sup>。

人間の個という概念は、自然からの独立、物自体からの独立として展開されていき、それは抽象的個別性(Die abstrakte Einzelheit)<sup>(30)</sup>という言葉として与えられる。このような個人は、第1に、外的なものである自然、国家、宗教を内的論理からしか欲求しない。第2に、それは全体と個とを統一する Sollen の世界よりも、個人の主体的意識による存在を提示する。ここでは社会的存在(Gesellschaftliche Sein)としての個の問題が当初から問題の中心ではなく、抽象的個としての個の主体性が問題であつたように思われる<sup>(31)</sup>。

学位論文での個人的欲求の問題が明確になるのは、いわゆる点と線の弁証法<sup>(32)</sup>であるが、このよう

注(27) K. Marx, Differenz der demokritischen und epikureischen Naturphilosophie, MEW., Ergänzungsband., 大内兵衛他監訳「マルクスエンゲルス全集」。

(28) 正木八郎「マルクスにおける実践概念の生成」思想, 10月, 1972. p. 32.

(29) エピクロスからのマルクスの引用「(-)個的な物体は、総体的にいて、それ自らの固有の定在性を、これらすべての属性から得ているのである。」K. Marx a. a. O., SS. 41-42, 前掲訳書, p. 37.

(30) Id., S. 52, 同上 p. 46.

(31) Id., S. 181. 同上 p. 210.

(32) すなわち「点が線の中で揚棄されているように、どんな落下する物体も、そのえがく直線のなかで揚棄されている。」(Id., S. 280. 同上 p. 208.) という命題は真理かどうかである。この問題は個と全体との存在論的問題として理解できる。エピクロスはこの命題を批判し、個の存在が全体という他在に集約されるということは個のもつ欲求としての感覚が全体と同一化することだと指摘する。

にマルクスが執拗に個人と全体との分離を追っているのは、それが現実社会の矛盾への接近の方法でもあったからだと思われる。しかし、このとき彼は直接現実との関係までを論及するにいたらず、個と全体との矛盾の問題に終始している。すなわちマルクスは個の立場と全体との立場が分離するのは、全体の中に矛盾があり、全体の中で個を疎外するものがあるからだというように展開する。

『国法論』の中でもマルクスは、諸個人による社会把握から全体を批判しようとする。しかも、その場合の全体は、抽象的な社会全体ではなく、国家となっている。諸個人の社会の反映として市民社会が、個人的欲求そのものの展開する理想的な社会としてあらわれ、国家がそれに対立する疎外物としてとらえられている。<sup>(33)</sup>ヘーゲルにとっては、市民社会と国家とは対立概念ではなく、相互補完概念であるが、マルクスにあっては、国家は個人を歪曲する全体として、とらえられている。そうした国家に対して、市民社会は、政治的社会を必要とし、市民社会は、政治的社会と同一化されている。そのため市民社会自身が一つの全体像としてとらえられざるをえなくなり、市民社会は一面で類をなす概念としてとらえられているように思われる。

ここでマルクスの個人的欲求は市民社会と一致してしまい、市民社会の諸矛盾を把握できないという矛盾にいたっていることに注目したい。そこからの道は二つあり、1つは市民社会を社会階級の対立としてみる見方と、もう1つは市民社会を諸個人の欲求の対立と社会階級との重層としてみる見方である。後者の立場にたつのは、第3手稿からであり(完全には'50年代)、第1手稿までは前者の立場に立つことになる。

こうした前者の把握の代表例は『ユダヤ人問題によせて』と『法哲学批判序説』である。ここではすでに、社会階級と疎外のモチーフがあらわれており、個人の欲求は、社会階級の欲求として展開されているようである。

『ユダヤ人問題』の中での宗教、国家批判は市民社会の矛盾を表現するものとして把握され、市民社会の単なる疎外物としては把握されていない。したがって、宗教、国家への批判は、市民社会の分裂への批判、市民社会の分裂の根本的原因の探求という方向へ向かっていく。市民社会は、そこではじめて利己的集団であり、公民(citoyen)と市民(l'homme)が分離している社会と考えられることになる。<sup>(34)</sup>そこで市民が公民となるための社会階級として、自己の個別的労働を類的存在に高めている労働者の役割が要求される。それが一層明確になるのが『法哲学批判序説』である。<sup>(35)</sup>

この論文では、政治的公民への使命をおびた集団欲求としてのプロレタリアートの概念が明確にあらわれている。プロレタリアートがこうした欲求をもつ階級となりうるのは、プロレタリアートだけが市民社会を同一化するために必要な自然との一致を、労働をつうじて行うことができるから

注(33) K. Marx, Kritik des Hegelschen Staatsrechts, MEW. S. 214 大内他監訳「マルクスエンゲルス全集」p. 245.

(34) K. Marx, Zur Judenfrage, a. a. O., S. 370. 同上 p. 406.

(35) K. Marx, Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie, a. a. O., 同上訳書。

であり、かつ、一方で彼らが資本によってその自然との同一性を否定されている階級であるということによる。<sup>(36)</sup>したがって、プロレタリアートの変革への欲求は、たんに抑圧された階級であるということだけでなく、労働手段や生産物である自然物に直接にたずさわっている階級であるということによっても確証されている。

このようにマルクスの社会把握の方法は、欲求論の観点からすれば抽象的個人の欲求から、現実社会の社会階級の欲求へと変化しているわけである。第1手稿もこうした変化の上になんて展開されていることを忘れてはいけないのである。

第2の経済学へのアプローチの問題については、彼の研究が労賃の把握や、社会階級としての労働者の窮乏の原因の把握に向かっていることである。そしてそこでは、本来労働者がつくりあげた価値を資本が収奪する<sup>(37)</sup>といった概念ではなく、資本、地代との闘争によって労賃は決まるという展開がなされている。「労賃は、資本家と労働者のあいだの敵対的闘争によって決まる。」<sup>(38)</sup>プロレタリアートの賃銀への欲求（それは集团的欲求の1つ）は資本との闘争によって規定される欲求であり、本来のプロレタリアートの欲求（それは、生産手段、生産物をつうじた自然への欲求）からは疎外されてくる。すなわち、彼らの集团的欲求の真の夢は、生産物の使用価値への欲求であるが、労賃という形をとるとき、すでにそうした欲求は失われているということである。

しかも、その労賃への欲求も、社会集団の欲求の中ではもっとも弱い。それは労働者の賃銀への欲求が、機械の使用や酷使という資本集団の欲求との闘争において弱い立場にあるからである。<sup>(39)</sup>こうした弱い立場として、労賃の分析は、国民経済学の範囲でなされている。ところが労働者集団の欲求という点では、まだ明確な経済分析にもとづいているのではなく、それまでの社会把握の視点が主力であることがわかる。こうしたアプローチの仕方は、当然集团的欲求相互の対立として資本制社会を把握することに進まざるをえず、諸個人相互の欲求の対立としての資本制社会把握は困難となっている。

こうしたことを前提にして、疎外と欲求との内容をみていくことにする。マルクスの疎外論は、疎外 (alienation) の解釈に始まっている。国民経済学は「労働が生産するところの対象、労働の生産物は、労働に対して、ある疎遠なものとして、生産者に依存しないものとして立ち向う<sup>(40)</sup>ということ。」それは資本が、その成立においては讓渡 (alienation) であったことからきている。「資本すなわち他人の労働の生産物にたいする私的<sup>(41)</sup>所有は、何にもとづいているか」という問いに対して、資

注(36) Id., S. 388, 同上 p. 425.

(37) 「経哲手稿」では労働価値説は受け入れられていない。

(38) K. Marx, Ökonomisch-philosophische Manuskripte, a. a. O., S. 471. 前掲訳書, p. 29.

(39) Id., S. 475 同上, p. 37.

(40) Id., S. 511-12 同上 p. 98.

(41) Id., S. 483 同上 p. 51.

本制成立前の世襲制、すなわち土地から労働者を駆逐していき、労働に対して「その譲渡を要求する」<sup>(42)</sup>ことに答を求めている。私的所有の社会が、こうした資本の譲渡要求から成立する以上、譲渡は私的所有の本源的な社会的基礎であるということになる。

そうした社会的基盤の上では、労働の対象化 (Vergegenständlichung) は、外化が譲渡 (Entäußerung) することになってしまい、掌握する (Aneignung) というもう1つの意味は消滅していく。資本と賃労働との関係は、こうした対立をあらわす表現形態である。この疎外の把握は、ヘーゲルと違って対象化<sup>(43)</sup>と外化を区別し、外化が他面で譲渡であるということによって、外化を疎外された社会の生産行為と考えている。こうした譲渡社会では、対象化は外化とならざるをえない。

こうしてプロレタリアートの役割は、疎外 (譲渡) をのりこえる真の階級ということになる。ここに、欲求が疎外をのり越えるものとして登場する基盤があり、かつそれは階級的欲求と深く結びつかざるをえないのである。それは、労働者の集団としての全面的欲求であり、それを阻害する疎外 (譲渡) あるいは外化は、そうした欲求の否定であるということになる。この欲求を否定された労働者は「労働のなかで自分を肯定せず、否定し、快く感じず、不幸と感じ、なんら自由な内的および精神的エネルギーを発展させず、彼の肉体を苦行で衰弱させ、彼の精神を荒廃させるということである。」<sup>(44)</sup>ということになる。労働者は、自己の欲求を労働の中でまったく充足できず資本の欲求に包摂させられていく。人間の全面的な欲求の実現は、労働者が生産手段などの対象から分離しないことであるので、労働者の権力奪取への欲求が出現してくる。労働者のこうした階級的欲求は、個人の欲求からとらえられてくるのではなく、階級的個人としてのエゴイズムも含む社会的欲求としてとらえられることになる。

類的生活という概念は、こうした階級的欲求を表現している。だから個人的欲求という概念はこの限りにおいて二義的な問題となっている。したがって、それは譲渡による疎外を通じて形成される、労働者からの生産物、生産手段の収奪という論理は、人間と人間との疎外をそうした脈絡の中から引きだそうとする。「人間が彼の労働の生産物から、彼の生活活動から、彼の類的存在から疎外されていることの、1つの直接的帰結は、人間からの人間の疎外である。」<sup>(45)</sup>人間と人間との疎外が、

注(42) Id., S. 484 同上 p. 52.

(43) ヘーゲルは、古典派経済学の alienation という言葉を疎外と解釈している。そしてこの古典派経済学が問題にしたのは生産者の生産物が他の生産者に譲渡されていくという過程であった。自然法的社会の契約はそうした商人的譲渡を本源的自由の受付 (Übertragung) 譲渡 (Veräußerung) として述べ、商人社会の中にある分裂を消極性として意識していたのである。Schelling にあっても、制約 (Bedinge) という言葉がつかわれていて、それは人間の本来の行為が物となっていく行為として negative としてとらえられているのである。しかし、ヘーゲルにあっては、alienation は市民社会の積極性としてとらえられている。Lukács, Georg., Der Junge Hegel und die probleme der kapitalischen Gesellschaft, 1947 「若きヘーゲル」 p. 279., J. Hyppolite. Études sur Marx et Hegel, 1955 はヘーゲルの積極性を高く評価している。

(44) K. Marx, a. a. O., S. 514 前掲訳書 p. 102.

(45) Id., S. 517 同上 p. 108.

生産手段、生産物の譲渡に見い出される以上、そうした原因は資本と賃労働という階級的個人として対立である。ところが、歴史的な発展は一方で人間の諸個人を独立化させていくわけであるから、人間諸個人の疎外関係は生産の中での生産手段の掌握関係だけによってきまるものではない。人間諸個人の疎外関係は、人間諸個人の形成とその社会的意識の形成を決定づけるような生産諸力によってきまるものである。マルクスの第一手稿の論理には、労働者が生産手段を獲得することによって自然と直接的な同一化<sup>(46)</sup>を有し(フョイエルバッハの論理)、そうして人間と人間とは疎外することなく同一化するのであるという大前提があった。その大前提も人間諸個人の発展が、そうした疎外を媒介にしてつくりあげた分業の上になりたつものである以上、順序は逆となるべきであった。すなわち、社会の表面では人間諸個人の発達によって、労働者や資本家としてのカテゴリーが意味をもたなくなるようにみえるのだから、分析するには表層としての人格的個人と深層としての階級的個人とを分ける必要があったわけである。

こうしたマルクスの展開は、第3手稿によってむしろ明らかになっているが、それには、諸個人の間を独立した欲求体系にまで高める貨幣分析が必要であった。次の項でこの関係を分析するが、その前に疎外と欲求の問題について触れておかねばならないであろう。

マルクスの類的疎外の展開は、第1の根本前提として人間と自然は労働を通じて同一化するということ、第2に、同一化するためには生産物、生産手段の掌握が必要であるということであった。資本制社会のように生産物や生産手段が資本家に掌握されているような社会にあっては、実際に働く人々は疎外されているということになる。疎外を克服するための、労働者階級としての人間の根本的欲求は、生産手段の獲得であるということになり、そこから社会主義を形成するという、変革の欲求が形成される。ところが、そうした欲求をもつ諸個人の人格は、無教育のために著しく低いのである。したがって多くの場合、諸個人の発展をぬきにして階級的欲求が形成され、それが疎外脱却の道となるならば、こうした欲求はおそらく階級的欲求のエゴイズムにすぎなくなるのである。

こうした疎外にからむ欲求論の難点を、後年のマルクスの用語を用いてさらに展開するならば、この疎外論には $W-G-W$ 、 $G-W-G$ といった単純流通次元での視点が欠落しているように思われる。この段階では、 $G-A$  (Arbeit)、 $G-P_m$  (Produktions mittel) の問題と疎外論がむすびつけられている。労働者階級の欲求は $W-G-W$ の問題ではなく、 $G-A$  (賃銀欲求)、or  $G-P_m$  (生産手段獲得欲求) の問題となっている。ところが、諸個人の欲求(これは資本家も含めて)になると、問題は $W-G-W$ といった商品循環を含むものとなり、疎外論は物象化論へと変貌せざるをえなくなる。だからマルクスのその後の展開を無視してこの第一手稿から、プロレタリアートの階級の変革の欲求を引き出そうとすることは、マルクスのその後の展開からいって非常に危険であるように

注(46) マルクスにとって自然と人間との同一性は、実践としての労働によってむすびつくが、それは人間と自然とが同一の生命体としてつながれているからである。



思われる。なぜならこの展開から考察するにせよ、資本主義下の欲求は、階級的対立の欲求としてだけとらえられるからであり、それを揚棄した社会主義での欲求もプロレタリアートの集団的欲求となってしまうからである。

### (b) 欲求と貨幣

マルクスにとっての欲求が、階級的欲求から諸個人の欲求と階級的欲求との重層へと進むには、貨幣による媒介が必要であったと思われる。欲求論はこうした媒介をへて成立するのであるが、「ミル評注」<sup>(47)</sup>の展開は、こうした彼の思考の変化の過程を如実に示していると言えよう。

「ミル評注」において、少なくともこうした個人的欲求の概念は潜在的に存在している。分業、生産、貨幣といったカテゴリーが説明される場合、人間の個人的欲求はそうしたカテゴリーの基礎として反映されているからである。たとえば  $W-G-W$  といった場合、貨幣は媒介的機能をもつ半面、人間の個々の活動を疎外していく機能ももつ。「貨幣の本質は、さしあたり、それにおいて所有が外在化されている点にあるのではなくて、人間のつくりだしたものがそれをとおして互いに補完されあうところの媒介的な活動や運動、つまり、人間的・社会的な行為が疎外されて、それが人間の外に在る質的なもの、貨幣の属性になっている点にある。」<sup>(48)</sup> マルクスは、貨幣がたんなる私的所有の外化の媒体ではなく、人間の欲求を外化していく媒体であるととらえている。人間の個人的欲求は、貨幣という社会的欲求の媒介によって規制をうけるからこそ、個人的欲求はそうした媒介のうちで大きく拡大していく。外化されるという行為のなかには、そうした個人的欲求と社会的欲求(貨幣)との二重の側面が展開されていく。

貨幣の出現は、人間個人をますます社会的欲求の奴隷としていく一方で、社会から独立し、他の人間から独立した個人を形成していく。「人間がそのまま人間の仲介者になるかわりに、この疎遠な仲介者をとおして、人間は自己の意志、自己の活動、自己の他の人間にたいする関係が、自己や他の人間から独立した力となっているのを直感する、かくて人間の奴隷状態は頂点に達する。」<sup>(49)</sup>

Gの導入により、人間の諸欲求は、他の人間に直接にはではなく、間接に関係する (beziehung)。そうした関係は他面で人間の個人的欲求の表現でもあるのだが、客観的にみるとやはり個人的な欲求ではなく社会的欲求(価値)を表現しているにすぎない。問題は、この媒介項G(貨幣)をいか

注(47) K. Marx, Auszüge aus James Mills Buch «Éléments d'économie politique», MEW. Ergänzungsband, 杉原四郎他訳「マルクス経済学ノート」, 未来社。「ミル評注」と「経哲草稿」の時代的考証は、ラービンによってなされた研究に依拠している。

第一段階 第一手稿 '44年4~8月。

第二段階 第三手稿 リカード, ミルからの抜粋。

ラービン「マルクス『経哲草稿』における所得の三源泉の対比的分析」(細見訳)「思想」3号, 571, 1971.

(48) K. Marx, a. a. O., SS. 445~6 前掲訳書 p. 87.

(49) Id., S. 446 同上 p. 87.

に克服していくかということになる。

人間の多様な個人的欲求も、貨幣に表現されなければ、社会的に認められることはなく、たんなる個人の願望におわってしまう。ところがこの貨幣という社会的欲求は、個々人の欲求と違って、個別性の指標である質をもたず、量的な単位しかもたない。こうして貨幣は量的な関係として、個々人の多様な欲求を深層に隠してしまうのである。貨幣のこうした作用は、貨幣自身がつくりあげたものではなく、諸個人が巨大な生産力を形成していく過程で必然化した生産力の量化と、私的所与との産物である。人間の個人的欲求の多面性が量化することは一方で使用価値→価値への転換であり、他方で一定の使用価値(量化可能な使用価値—商品)の増大でもある。こうした貨幣は、個人的欲求(使用価値)、社会的欲求(価値)を媒介する複合的な存在となる。

しかし貨幣は、ネガティブな形態のもとで一層展開するし、私的所与そのものの外化された形態である。「私的所与の私的所与に対する社会的な関係ということが、すでに私的所与の自己疎外の関係である。だからこの関係の向自的実存である貨幣は、私的所与の外在化であり、私的所与の特有の人格的本性の捨象である。」<sup>(50)</sup> 諸個人の人格的な具体的欲求を捨象するのは私的所与の外在化である貨幣である。貨幣の中で人間の個人的な具体的欲求は、量的にのみ拡大化することによって疎外される。

とりわけそうした疎外態としての貨幣の頂点は、紙幣形態、信用制度に求められる。「信用制度(一略)において、貨幣制度は疎遠な物質的支配が粉碎され、自己疎外の関係が止揚されて、人間はふたたび人間にたいして人間的な関係であるかの如き仮象を獲得した。」<sup>(51)</sup>  $W-G-W$ の形態は、ここでは形式においては同じであるが、その内容においては相異なっている。いままで $W-G-W$ にあっては、人間の個人的欲求が、社会的な量的欲求に制限されるということであったが、信用制度の $W-G-W$ は、その人間のもつ信頼までもが(現金払いではそういうことはなかった)量化されてくるのである。つまり、そこではその人間は支払い能力という信用を裏書きできる人物であるかどうかということが問題視される。「信用においては、金属や紙にかかわって、人間そのものが交換の仲介者になっている、ただし人間としてではなしに、資本とその利子との定在として。」<sup>(52)</sup> 人間が支払能力としてあらわれる場合には、その人間自身が資本となっているので、個人の具体性は消滅している。 $G$ と $W$ との分離は、 $G-W$ による社会的欲求への還元以上に、人間の個人的多面性を経済カテゴリー化してしまう。 $G$ と $W$ との分離は、支払い能力によって媒介されるから、 $W-G-W$ という本来の貨幣機能から、 $G-W-G$ の可能性を引き出す。

$W-G-W$ の中では、人間の個人的欲求は一面で疎外されつつも、多面で拡大していった。しか

注(50) Id., S. 447, 同上 p. 89.

(51) Id., S. 448, 同上 p. 91.

(52) Id., S. 449, 同上 p. 93.

し、 $G-W-G$ の中では、もはや人間の個人的欲求ではなく、ただ人間の量的欲求一般が個人的欲求としてあるだけである。貨幣は、たんなる人間の諸個人の欲求を配分し、媒介し、するという役割を失い、それ自体が人間の欲求の目的であるような役割を演じることになる。

ところがこうした形で明確化できるのは、後年のマルクスを知るからであって、マルクスの「ミル評注」での意図はむしろ $W-G-W$ の段階にとどまっている。もっともそれだからこそ、他面で諸個人としての社会把握を可能にしたわけである。労働者集団を単純に指差していく立場から、諸個人を媒介にして類をとらえるというやり方は、この後も貫かれていく。マルクスは、個人と個人との分離を $G$ の中に見ることによって、その疎外のポジティブな面とネガティブな面を歴史的にも把握しえる段階にいたった。

さて、マルクスは、類的疎外態<sup>(53)</sup>という概念を一面で $W-G-W$ の中にみいだして、類的形態への移行をそうした前提の上で展開していく。類的疎外態という概念は、類的本質を獲得するための大きな条件としてとらえられる<sup>(54)</sup>。個人的欲求が他の個人的欲求へむすびつくのは、個人的な欲求同士が偶然的な関係から、貨幣による必然的關係に発展したときである。それは貨幣を通じて媒介される社会的価値の社会である。類的社会の疎外形態としてこうした交換社会が把握されたことは、個人的欲求の量的拡大→類的疎外態→個人の欲求の量的拡大→類的社会の形成→個と類との一致という論理形式に変わっていることを示している。この場合の類的社会のとらえ方は、原始的共同体とは区別されている。第一手稿では、自然からの疎外(類的疎外)→自然の獲得→生産手段の獲得→資本賃労働の揚棄→類という集团的欲求と社会的欲求(資本の欲求)との関係でとらえられていた。しかし第三手稿にいたる過程で、これに欠如していた $W-G-W$ という諸個人の欲求過程が形成されたように思われる。第一手稿までは、分業、個人的欲求、生産力といった概念は問題とされていなかった。ところが、第三手稿では、分業による類的疎外の形成、個人的欲求対社会的欲求の対立として類的疎外態の把握がなされるのである。

ここで貨幣と欲求との関係と意義を再確認しておくことにする。貨幣という流通概念(社会関係の概念)の導入は、マルクスの論理展開を大きく変えさせた。 $W-G-W$ は、生産手段の掌握に関連するプロレタリアートとブルジョアジーとの階級的欲求の対立関係から、プロレタリアートもブルジョアジーも含めた疎外態としての諸個人の社会の対立関係への進展を可能にした。 $W-G-W$ は諸個人の欲求が類的疎外態である貨幣によってむすびあっていることを示す。そこには、諸個人の欲求の多面性が $G$ へ極限化されていくということ、他面で極限化されるからこそ一層諸個人の欲求は形成されていくということがとらえられていた。社会把握はこうした個人的欲求の多面性が、

注(53) Id., S. 557, 「経哲手稿」藤野訳, p. 183.

(54) 「『疎外』とは単なる本質の否定ではなく、分裂した形での、非本来的な形態への、本質的なものの獲得ということになる。」という野地氏の指摘は示唆にとんでいる。野地洋行「マルクスにおける労働概念の展開」三田学会雑誌, 11号, 67巻 1974, p. 3.

初期マルクスにおける欲求概念（上）

いかに揚棄されるかという点にむけられていく。こうして社会主義は、個人的欲求のもつ二元性（進歩と疎外）を解決する場所として措定されてくるにいたる。もちろん、こうした展開はさらに後の展開（50年代）をまつ以外にはない。この意味で、貨幣研究が個人的欲求の社会である市民社会の把握へと導いたことを注意すべきであろう。（以下次号）

（慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程）